

遊びながら楽しんでまちづくり ～柳本もてなしのまちづくり会 (奈良県天理市柳本町)～

10年前に大量の三角縁神獣鏡が出土したことで一躍有名になった黒塚古墳。多くの考古学ファンが黒塚古墳のある「柳本」に押しかけた。全国から注目を浴びたことをきっかけに、自分たちのまちの魅力に目覚めた住民がまちづくりに取り組んでいるのが「柳本もてなしのまちづくり会」である。もう一度、一からまちの地域資源を見直し、将来に引き継げるまちづくりをめざして活動している。

豊かな歴史の残るまち・柳本

柳本町は天理市南部のひっそりとした佇まい^{たたず}のまちである。まちの東部山麓には、日本最古の道といわれる「山の辺の道」が南北に通じ、古代から人の往来があった土地柄。その道沿いには大和朝廷の創始者とされる第10代崇神天皇の陵墓をはじめ多くの天皇陵や古墳が連なり、柳本古墳群を形成している。



崇神天皇陵

まちの中に
残る武家屋
敷通り



また、江戸時代には、織田信長の弟、織田有楽^{うらく}斎^{さい}（織田長益）の五男・織田尚長が治めた柳本藩が置かれ、明治維新まで織田家が代々藩主を務めたまちでもある。まちのなかには、今でも江戸時代の社寺や武家屋敷、町家などが残っている

そんな豊かな歴史の面影を残す柳本のまちであるが、今から10年前の1998年、まちのまん中にある黒塚古墳から古代の青銅鏡が多数出土した。出てきたのは、33枚の三角縁神獣鏡。それまで

片田舎のまちだった柳本が、一躍全国から注目を浴びることになった。当時の古墳一般公開日には2日間で約2万3千人が見学に訪れたという。JR桜井線柳本駅から古墳までの道は人でごった返し、見学者の待ち時間は4時間にも及んだ。



まちの玄関口「JR柳本駅」
ここから山の辺の道に向かうハイカーも多い

前代未聞の来町者に触発されてできたのが、今回紹介する「柳本もてなしのまちづくり会」である。

「これだけの魅力あるまちを眠らせておくのはもったいない。まちの魅力を磨けばまちの活性化にもつながる」と思い立ち、同会発起人は、奈良県立大学の村田武一郎教授が主宰するまちおこしの研究会（Ecological Development 研究会）に入ってエコロジカル・デベロップメントの勉強を始めた。

エコロジカル・デベロップメントとは、簡単に言うと「地域が連綿と引き継ぎ育ててきた自然、歴史文化、生活文化、人、伝統技術などの地域資源を活かしながら地域開発を行い、将来世代へも引き継ぎ得る地域をつくること」。柳本のまちが必要としていたまちおこしのバックボーンをこの研究会で学んだ。

「生まれてよかった、住んでみてよかった、遊びに来てください、ようきゅはったな（よくおいでになったな）、やなぎもとへ！」を目標に「柳本もてなしのまちづくり会」を2002年5月に立ち上げた。

現在、会員は約60名。平均年齢が68歳で、社会の一線を退いた人たちが中心メンバーである。お互いに学習し合いながら自分たちのまちの魅力を発掘し、磨き、情報発信に取り組んでいる。

柳本発見ふる里写真展

最初に行ったのが「ふる里写真展」。地域の人たちにまずは地元の地域資源の魅力、柳本の良さを知ってもらおうと、柳本地区を中心に山の辺の道などの写真を募集した。出品者のそれぞれの目が感じた柳本の自然や風景、歴史遺産などが集まってきた。

応募作品は、毎年、地元の公民館（10月16日～月末）や、山の辺の道を散策する観光客が立ち寄る天理市トレイルセンター（11月1日～30日）



天理市トレイルセンターで行われた「柳本発見ふる里写真展」



で展示している。まちの魅力を再発見するのが目的であるので、出品された作品には優劣をつけず、全員の作品を展示している。

黒塚古墳一帯を清掃

続いて行ったのが、黒塚古墳一帯の清掃である。現在、黒塚古墳一帯は公園として整備されている。それまで天理市のシルバー人材センターが委託管理していた黒塚古墳一帯の清掃を同会が引き受け、毎週日曜日に交代で草刈りや清掃を行っている。

「柳本の中心的な地域資源である黒塚古墳を守るのが、会の発足の原点。ここを綺麗にしてこそ、おもてなしができる」と、同会の皆さんは語る。同会では、古墳の周囲の清掃だけでなく、武家屋敷の残る通りや山の辺の道などに、桜や柳、藤などの植樹も行っている。



毎週日曜日に行われる、黒塚古墳の清掃

竹炭・花炭づくり

柳本の東には龍王山がそびえるが、その麓では竹が増殖し里山を荒らしている。同会ではそれを伐採して竹炭をつくり有効利用しようと、2004年から竹炭づくりに取り組んでいる。崇神天皇陵の奥の里山に自前の炭窯を設けた。資金は県の健やか支援財団が行っている「地域ささえあいカンパニー支援事業」の補助金を活用した。

炭窯づくりから竹の切り出しまですべて自分たちの手で行う。炭づくりは約一週間もかかる気の長い、しかも手のかかる作業である。会員が昼夜を問わず交代で炭窯に張り付く。その間、1時間から2時間ごとに窯の温度を測って記録していく。炭焼きについては素人ばかりで最適な温度、手順を

探り、試行錯誤を重ねながら炭づくりを進めてきた。

竹炭ばかりでなく、会員のアイデアで、まつぼっくりやかぼちゃ、瓢箪、パイナップルなどで炭をつくることにも挑戦した。これらの炭のことを「花炭」と呼ぶが、野菜や果物の形がそのまま残った花炭は珍しく、奈良県の観光情報発信基地「東京代官山 i スタジオ」や奈良テレビ等でも取り上げられた。空気清浄や湿気取りといった炭の本来の使い方だけでなく、インテリアのオブジェとしても引き合いがあり、同会では生産が追いつかないといううれしい悲鳴を上げている。



自分たちでつくった、会員自慢の竹炭窯

材料が10種類以上に及ぶ花炭



夜の柳本を演出する「柳灯会」

同じく2004年から「柳灯会^{りゅうとうえ}」というまちおこし行事を始めた。毎年9月に黒塚古墳の周囲や武家屋敷が残るまちなみを約3,000個のロウソクと60個あまりの提灯で灯し、まちじゅうに幻想的な雰囲気を出す。奈良市で行われている「なら燈花会」にヒントを得て始めたが、現在では同会最大のイベントとなっている。特に、黒塚古墳の周囲に並べられたロウソクの灯りが創り出す夜景は圧巻。ロウソクの灯りが古墳周囲の水面に映え、まちの象徴である黒塚古墳を黒々と浮かび上がらせる。

会では毎年6月から準備に取りかかる。ロウソク代の原資となる協賛金は、自治会に協力しても

らい集める。ロウソクを灯すガラス瓶には「柳灯会」と書かれた和紙が巻かれるが、そのすべてに協賛した人の名前が入れられる。企業にお願いする提灯には協賛企業の名前も入る。

2年前の06年からは、地元の小学生も参加している。ひとりにひとつずつ将来の夢などを書いてもらった和紙が巻かれた灯りも通りに並べられる。柳灯会の夜には、子供達が自分の夢が記された灯りを探しながらまちじゅうを歩き回るといふ。夢を書き込んだ和紙は、卒業式の時に卒業証書とともに手渡され、子供達だけでなく親にも感慨深いものになっている。



黒塚古墳に並べられたロウソクの灯り（柳灯会）

柳本学研究会

有史以前からの長い歴史を持つ柳本であるが、地元の多くの人たちは、案外、自分たちの身近にある歴史遺産や文化については知らない。その歴史的文化的価値に至ってはなおさらのことである。そんな状況に気づいた同会のメンバーが定期的に集まって学習会を開くことにした。

「柳本学研究会」と命名され、2006年12月に始まった。現在、毎月第二火曜日に集まり、地域資源の洗い出しや調査を進めている。研究会では、文献等にあたるだけでなく、お互いの知識を交換しあったり、町中を歩き回ることもしばしばという。

現在、次世代の子供達に伝えるべき「宝物」を記録にして残していこうということで、「柳本百選」と題した冊子の制作に取り組んでいる。柳本のまちやその周辺にある古墳や神社仏閣から道ばたのお地藏さん、民話・風習に至るまで100の

「宝物」を探しまとめているところである。



毎月1回行われる「柳本学研究会」(上)と編纂が進む「柳本百選」冊子(右)



モットーは「遊びながら楽しんで」

今年の5月には会発足後7年目を迎えた。大学の研究会参加から始まった同会のまちづくり活動は、これまで見てきたようにさほど長くはない期間のなかで、盛りだくさんの事業を立ち上げてきた。

本年度も「平城遷都1300年祭」の「県民活動支援事業」に応募し、見事採択されている。「日本の故里(大和朝廷発祥の地)柳本地域の魅力探し」というテーマで、「平城遷都1300年祭」が行われる2010年に、「柳本百選」編纂を進める他、「見所パンフレット」の作成、「大和朝廷時代のパネル展示」や「歴史探訪クイズラリー」など新たな催しも行う予定である。

メンバーが定年退職組中心のいわゆる高齢者が多い同会にあって、次々と新しい事業を広げていくパワーはいったいどこから生まれて来るのだろうか。

同会のモットーは「遊びながら楽しんで」。黒塚古墳一帯の清掃活動も、深夜も含めて1週間に渡る炭焼きも、また、まちに3,000個のロウソクの灯りを並べる柳灯会も、会のメンバーはすべて「遊びながら楽しんで」やっているのだという。「だから長続きもするし、新しいことも手がけられるのだ」と同会のメンバーは口をそろえる。

冒頭に紹介した研究会を主宰する、奈良県立大学の村田教授は「足湯銭湯や和菓子づくり、家老

屋敷を活用したレストランなどを立ち上げ、まちにお金を落としてもらうしくみをつくれ!」と提案しているが、同会は、提案を将来の目標に、少しずつ焦らずに、「楽しいまちづくり」に重点を置いてまちづくりを進めている。しかし、この屈託のなさがまちづくりの推進力ともいえるのかもしれない。また、まちづくり活動は楽しめなければ長続きもしない。

今後、団塊の世代のリタイアが進み、まちには確かな足取りで熟年者が増えていく。そんななか、「成熟した大人が楽しみながら実践していく」柳本のまちづくりは、ひとつの先導的なまちづくりモデルとして評価されるべきものと思われる。もちろん、豊富な地域資源があればこそそのまちづくり、との意見もあるかも知れないが、それを差し引いてもなお余りある。(井阪、丸尾)

◇◇「黒塚古墳」ひとくちメモ◇◇

黒塚古墳は、古墳時代前期(3世紀後半~4世紀)のものと推定される古墳(全長132メートルの前方後円墳)で、柳本町のまちなかにある。1997年から翌年にかけて大和古墳学術調査委員会が中心となり行った発掘調査で、三角縁神獣鏡33面と画文帯神獣鏡1面が発掘された。

古墳周辺は天理市によって整備が行われ、柳本公園となっているほか、隣接して「黒塚古墳展示館」が設けられている。今年1月から3月にかけて放映された民放ドラマ「鹿男あをによし」で同館がロケに使われたこともあり、来館者が増えている。

(資料:「天理市立黒塚古墳展示館」案内)



「黒塚古墳」全景



「黒塚古墳展示館」(左)と同館内の石室内復元模型(右)